

■ 特集「未来」

体験学習と未来

中 尾 陽 子

(南山大学経営学部)

私がラボラトリー体験学習という学び方と出会って、20年以上の月日が経った。南山短期大学人間関係科の学生として、この学びに出会った頃は、「何だこれは!？」という驚きはありながらも、「おもしろい!」という気持ちの方が大きくて、ただただ毎日夢中で過ごしていた。周りにいる同期生の中には、「こんなこと毎日やっていて、将来何の役に立つわけ?」などと言い、ニンカン的な授業をほとんど放棄しているような人もいた。私は、そんな同期達に対して「そんなことばかり言って、だったらあなたは何がしたいの?」と思うことはあっても、自分自身が“いまここ”で取り組んでいることと、自分の未来とのつながりを特に考えることなどないまま、2年間の学生生活を駆け抜けた。学校へ行くのが楽しくて楽しくて、授業以外の時間も学校の中で仲間達と何だかんだとニンカンぽい話をしながら過ごし、たいしてやることもないのに自主合宿を頻繁にして…。この時はまだ、プロセスとは何かも、お互いを大切にしたコミュニケーションとはどのようなことなのかも、全くきちんと考えていなかったし、できていかなかったなあ…と、今になってつくづく思う。それでもその時の自分は、体当たりで人と関わり、自分なりに真剣に人と向き合っていたのも事実だ。“いまここ”だけにしっかりと目を向けながら、仲間やスタッフ達と、これまで体験したこともない楽しく自由な関係を築いたことは、私にとって何よりの宝物になったと感じる。

こんな熱いニンカン生活の後、社会に出て、ようやくニンカンでスタッフ達が伝えようとしてくれたことの意味が少しずつわかってきた。何だか気持ちの悪いこの関わりは、コンテンツとプロセスが一致してないからなのではないか?とか、お仕事の中では、相手の思いを本当にわかってほしいのか?など、体験学習で学んだことの意味がわかるきっかけは、多くの場合、社会の中では当たり前のように起こっている不自由な関わりだった。ニンカン

で知ったキーワードの一つ、Change Agentとなって生きていくことがどれだけ難しいことなのか、3年間の社会人生活から十分実感できたように思う。『体験学習で得た学びが、自分の未来とどのようにつながるのか』。社会に出て見えてきたそのつながりは、決して楽しいものではなかったけれど、2年間の熱い学生生活は、私のからだに体験から学ぶということをしかりと刻み込んでくれていて、そこからまた違う道へと歩み出す力を与えてくれた。

その後私は、沢山の方のサポートのお陰で、体験学習のスタッフとして働くチャンスをいただいた。今日までに所属した主な職場は二箇所、最初の職場が短期大学の生活学科人間関係コース、次の職場が現在所属する四年制大学の経営学部である。ここで学生さん達と関わる中で、私はこれまで何度も、『体験学習が、自分の未来とどのようにつながるのか』という問いと向かい合うことになる。ある時は、学生さんから「これを学んでいてどんな意味があるんですか？」と問われ、それに答えるような形で。また、それとは全く逆に、あまりにも今学んでいることに対する意識が希薄な学生さんに、“いまここ”と“未来”のつながりを伝えたくて、求められてもいないのに話しかけていくという形で。以下では、これらのケースを紹介しながら、私が大学生と共にラボラトリー体験学習に取り組む中で直面している課題を示していきたいと思う。

未来とのつながりを考えられない人たちとの関わりの中で

初めて常勤として働いた短期大学で、私が学生さん達と関わって一番驚いたことは、自己肯定感のとても低い人が多いことだった。もちろんそれは一部の学生さんであり、決して全員ということではない。しかし、フィードバックのつもりでこちらが伝えたことを、その意図とは全く違う意味に受け取られた経験は数知れず。傷つけるつもりはないのに傷つけてしまったことも、誤解からものすごい反撃を受けたことも、私にとってはどちらも本当につらい体験だった。最初の頃は、それまでの自分がほとんど経験したこともないような関わりだったため、なぜそのような反応をされるのか全く訳がわからなかった。しかし、理解できない体験をする度にふりかえり、学生さん本人や同僚のスタッフ達とわかちあい、段々見えてきたのは、「自分はどうせダメだから」という思いで身も心もしっかりと固く閉ざしたかのような、学生さん達の姿だった。自分に対して、「どうせダメだ」という思いが強いと、他者から投げかけられる言葉はこんなにも違った意味に受け取られるものなんだなあ、大きな驚きを感じながらも、そこで起こっているプロセスを段々理解できるようになってきた。

その中でも、エネルギーのある学生さんは、他者の言葉を『自分への攻撃』と受け取る傾向があるようで、その様子は、ハリネズミが体中の針を逆立てて自分への攻撃をかわそうとしたり、猛獣が牙をむいて威嚇してくるような印象

だった。ただ、そういう学生さん達の一貫した傾向として、本当に向かい合っ
て対決することはできないという特徴もあった。逆ギレされた、と言う方がイ
メージとしてよく伝わるのかもしれないが、怒った彼女達がわーっと騒ぎ、一
方的に関わりを断たれるというパターンが多かったように感じる。

一方、エネルギーの低い学生さんの場合は、他者の言葉を『自分への否定』
と受け取る傾向があるように見えた。肯定的なフィードバックをしているつも
りでも、否定的な意味に受け取られてしまうので、そう受け取られないような
言葉を選び、伝え方を選び…。それでも、自分を否定する思いはどうしても
ない程強固なようで、エネルギーをかけて伝えても、伝えても、否定される関
わりは、伝える側も疲れ果ててしまうような日々だった。

どちらのタイプの学生さんにとっても、体験学習の中で大切にされている
フィードバックが正常に機能しないところに、最大の問題があったように感じ
る。その学生さん達にとって、過去の間違いなくしんどい関わりから作られた
と思われる、「どうせ自分はダメだから」という強固な思いは、フィードバ
ックを通じて“いまここ”にいる自分の姿を冷静かつ客観的に見つめるとい
う営みを、完全に放棄させてしまっていたのではないだろうか。そのような状態
にある人たちに、体験学習による学びを重ねることが、自分らしく生きる未来へ
とつながることをいくら話してみたところで、それが実感として伝わるはずも
なかったのだろう。まずは、“いまここ”の自分をありのままに見たり、受け
止めたりできるようになることが先決だろうと考え、どのように伝えれば、肯
定的なフィードバックを肯定的なメッセージとして受け取ってもらえるのか、
そのことにエネルギーをしっかりと費やした。ジャーナルに書くコメントも、
誤解されないようにと思いながら書いていると、どんどん長くなり、かえって
伝わりにくい内容になっていたのではないかと、今になって思う。

未来とのつながりを考える人たちとの関わりの中で

その後ご縁があって、私は現在所属している南山大学経営学部でお世話にな
ることとなった。四大へ移って驚いたことの一つは、キャンパスですれ違った
学生さんが、笑顔で挨拶をしたり、声をかけてくれるということだった。この
ような関わりをすっかり忘れ、驚いている自分にも愕然としたが、それと同時
に、短期大学の中で関わっていた学生さん達のことを思い出し、とても苦しい
気持ちにもなった。私との関わりを強く閉ざしていた彼女たちが、それまでに
どれだけ苦しい関わりを体験してきたのか想像せざるを得なかったからだ。そ
して、あの時自分に出来た関わりがもっとあったのになあ、という気持ちも強
くわいてきた。

そんな思いを持ちながら、経営学部の学生さんと一緒に体験学習の授業を始
めてみると、またまた新しい驚きに出会うこととなった。経営学部の学生さん
達は、1年生の頃から企業の中で働く自分をイメージし、それに役立つ知識や

スキルをつけようというモチベーションの高い人も多い。そのような学生さんにとって、やはりラボラトリー体験学習は、楽しいけれど、これが一体何の役に立つのだろうかという不安や不満を感じさせるものようである。こちらとしても、出来るだけ余計な不安を抱かせないようにと、社会へ出た後にこそ大切になってくる、体験から学ぶことの意味、コンテンツとプロセスを捉えることの大切さ、自己開示とフィードバックの重要性などを話すのだが、あまりピンとはこない場合が多いように感じていた。

ここでは、そんな彼らと、とある授業で、「この先の授業でどのようなことに取り組みたいか」を話し合っていた時に起きた、最近の出来事を紹介したい。このクラスは、それまでに半期間週1コマの体験学習に取り組んできたメンバーが集まっていた。『もっと成長したい』という気持ちの強い、かなり熱心なメンバーが集まっていて、私自身とても楽しみに授業へ参加しているクラスの一つだった。

彼らは、その授業を“人間関係の練習の場”と位置づけ、自分を発揮する力をつけることと、相手の気持ちや考えを知る力をつけることを通して、社会でいかせるコミュニケーション能力を養うというねらいを立てていた。それを実現するためには、具体的に、どのようなトレーニングをしたいかという話をしていた時のことである。あるメンバーが、

「社会に出たら、これまでこの授業でやってきたみたいに、本当の自分を見せたり、本音で話すことは絶対にできなくなるし、相手も本当の気持ちや考えを話してくれたりとは絶対にしないと思う。だから、これからはそういう場で相手と上手く関わられるようなコミュニケーション能力を身につけたい。」

と発言した。筆者は、ラボラトリー体験学習の根底をひっくり返すような発言が出たことに驚きながらもまずは黙って聴いていると、その発言にはっきりと賛同するメンバーも数名出て、その場は『社会人としてうまくやっていくためのコミュニケーションスキルを練習する』ことに同意するような雰囲気になりつつあった。どう介入しようかなあ、と思いながら様子を見てみると、

「でも、そんな練習をこの授業でわざわざすることに意味があるのかなあ？それは、アルバイトの中とか、知り合いの間でやろうと思えばできる練習だと思えるから、ここではもっと、本音で話すようなことをする方がいいじゃないかな。」

という発言が出てきた。こちらの発言に賛同するメンバーも現れ、議論はしばし平行線となった。長い議論の末、結局彼らは、授業では本音で伝え合うコミュニケーションをトレーニングしよう、と決めた。しかし、その結論に至る中で語られた理由は、『大人になると本音で話す機会も少なくなるから』『今のうちに』『このメンバーとの間だから』本音で語っておこう。『そういう練習をしておくことも、きっと何かの役に立つだろう』という内容だったのである。

この時の話し合いの体験は、私にまた新たな課題を示してくれた。メンバー

全員が、本当に『大人になると本音で話す機会も少なくなる』と感じていたのかどうかは定かでないが、あの時の彼らの様子から推測すると、一定数のメンバーが、本当に『本音で話せるのは今だけだ』と感じていることも間違いなさそうだった。この様子を見て、私は、これまで体験学習の意味を伝えても今一つうまく伝わらなかった理由が見えてきたように感じた。もし、彼らの身近にいる大人たちが、自己開示を避け、当たり障りのないことだけを口にするような関わりをしているとすれば、彼らがこのように考えてしまうのも無理のないことだろう。KYという言葉が流行った当時、中学・高校生だった彼らにとっては、場の空気を乱す可能性のある言動をしないのは当然、というような背景も影響しているかもしれない。とはいえ、私達が一日の中で仕事に携わる時間というものは、思っている以上に長い。ひどい場合には、起きている時間のほとんどを仕事に向けるような時もあるだろう。彼らは、その長い長い時間の中で、いつも自分らしさを隠し、本当の気持ちや考えを隠し続けていくつもりでいるのだろうか。そんな彼らの未来を想像すると、彼らの精神的な健康は一体どうなってしまうのだろうかと思ってしまう。ラボラトリー体験学習で取り組んでいることと、未来とのつながりをきちんと伝えていく必要性を改めて強く感じたのだった。

体験学習と未来とのつながりを伝えるには…

ただ、彼らの周りにモデルとなるような関わりが豊富でないとすると、このトレーニングを積んだ先にある“未来”をリアルな実感として想像してもらうことはとても難しいとも感じる。おそらく、本当に分かりあえる喜びも、自分らしさや本音を隠し続けて生きることの苦しさも、その体験を積み重ねていって、ようやく本当に“わかる”という側面はあるだろう。だから、その時が来るまで丁寧に体験を重ねていくのも、一つのやり方だと思う。しかしその一方で、自分の学んでいることが、この先の人生でどのように役立っていくのかをイメージできるか出来ないかによって、その学びへのモチベーションも、取り組みの度合いも、理解度も、大きく変わることが予想される。学びへの取り組み方としてはどちらもあり得るのだけれど、学びに対する動機づけを考えた時、“いまここ”の学びと“自分の未来”とのつながりを意識できるようサポートしていくことは、とても大切なことなのではないだろうか。そのために、スタッフとして私に出来ることは何なのだろうか。具体的に、何を示したり伝えたりすれば、学生さん達が“いまここ”の学びと“自分の未来”とのつながりを感じながら、意欲をもって学習に取り組むことができるだろうか。

おそらく、体験学習に関わるスタッフ達がこれまでも直面してきたであろうこの問いに対して、私はまだ自分自信納得できる答えを見つけられずにいる。いまの私にとっては課題が大きく、まだまだクリアすることが難しそうだなあと感じているが、自分が自分らしく、相手もその人らしく生きることの楽

しさを一人でも多くの学生さんに伝えたくて、この問いと向かい合う毎日である。